

出土遺物からみる鎌倉の開発

鎌倉時代前半を中心

The Development of Kamakura as Seen through Excavated Remains:
with a Focus on the First Half of the Kamakura Period

齋木秀雄

はじめに

- ❶ 鎌倉の旧地形
- ❷ 出土かわらけの略編年
- ❸ かわらけの分布と開発

まとめにかえて

【論文要旨】

中世初期の鎌倉は、滑川河口に大きな湿地があり、由比ヶ浜と材木座に標高8~9mの砂丘が広がっていた。砂丘の裾はJR鎌倉駅近くまで達し、起伏の多い地形であった。

この鎌倉に対する開発は治承4年に源頼朝が居住を定めてから行われたと言われる。しかし、すでに賑わいをみせていた鎌倉を敢えて寂しい景観にする事で頼朝の鎌倉造営業績を引き立たせたとする説もある。いずれにしろ当時の様相を文献資料から、現在把握されている以上に明らかにすることは困難である。

これに対して考古学の発掘調査では、痕跡（遺構）やモノ（遺物）を実資料として得ることが出来る。この内、ほとんどの遺跡から数多く出土するかわらけ皿は、器形変化が明確で出土分布から開発（居住）変遷をみると適している。鎌倉時代前半のかわらけを大まかに1期・頼朝以前、2期・頼朝居住前後、3期・源氏統治の鎌倉、4期・北条氏統治の鎌倉に分類し、分布状況をみると1期では鶴岡八幡宮周辺でしか出土しない。その後、2期になると直ぐに鎌倉駅周辺地域、若宮大路二ノ鳥居北側周辺地域、鶴岡八幡宮～大倉地域まで徐々に出土域が拡大する。3期には由比ヶ浜の砂丘域、坂ノ下地域を除き出土するようになる。4期ではさらに地域が拡大し、ほぼ丘陵に囲まれた市内全域から出土する。かわらけの分布は頼朝が居住を定めてから広がりが明確になり、北条氏の頃には砂丘を含めた市内全域から出土する事が掴める。

災害は火災が焼け焦げ、地震が噴砂・断層他の痕跡が確認されるに止まる。大規模な災害痕跡が発掘調査で確認される事がない。痕跡が確認できないことは「都市の再生力の強さ」を表しているとも言える。